

巻 頭 言

十年少し前、ローマにしばらく滞在していた。あの頃は憑かれたようにローマの街やイタリア以外の国の街々を歩きまわったものだった。ローマでは、自分が学校に通うとき、また子供の登校・下校に必ず親がついていくものだから、その行き帰りに、毎日、ヴァチカンのそばを通り抜けた。世界から、ヨーロッパからはバスを連ねて、多数の信者がひっきりなしにヴァチカン詣でにやってくる。この観光客を目当てに露店がならび、あやしげなみやげ物売りつける男たちが右往左往して、他所者に声をかける。毎日通っているこちらにはちっとも寄ってこない。観光客が落としていった食物のかけらに鳩たちが群がる。

そういうローマにも必ずホームレスの人達がたむろしている。夜になって店が閉まると、段ボールと新聞紙で自分たちの寝ぐらをこしらえ、風が当たらぬようにして、そこへ入りこみ、朝まで眠る。勿論、冬になれば凍死者も出す。辺りには尿の臭いがし、決して快い場所ではない。彼らは適当に露店商人のくれるピッツァなどで飢えをしのいでいるが、陽気なことが救いである。日本でいう民生委員のような男が時々回ってきて、「ようマルコ、元気か？」という風に声をかける。声をかけられたマルコは元気だよと行って、しばらく話をしている。彼は左手にダンボールの切れ端をもち、右手には小さい鉛筆を手をしている。民生委員が去ると、マルコはじっと紙切れに目を注ぎ、鉛筆で何やら書き入れる。僕はそっと後ろからのぞいてみる。そこには文字とも記号ともつかぬものが、実に、びっしりと書きこまれていた。その文字とも記号ともつかぬものにマルコはマルや線をつけ加え、じっと眺め、しかも実に考え深げに、見つめている。その悦に入った姿は絶対に余人を近づけない。この世界の中で彼だけが存在している。回りの雑踏や喧噪など何ほどのこともない。マルコは自分の生み出した紙切れの世界の中に没頭して、そこに深遠なアイデアを覗いている。

おそらくマルコの頭は狂っているのだろう。しかしこのとき、アイデアの観照という点で世の哲学者の誰がこのマルコに匹敵するだろうか。

ローマで最も交通量の多いのがヴェネチア広場である。ヴィットリオ・エマヌエーレの廟があり、かつてムッソリーニが演説したという建物に囲まれた、ロータリーである。ここにも一人の浮浪者がいた。彼は朝や昼、つまりラッシュ時になると必ず広場の中央に来て、交通整理をやるのである。右手を挙げて左手を水平に延ばし、しばらくすると左手を挙げて、右手を水平に延ばす。これを実に陶醉しているかのように、舞うかのように、よれよれの汚いコートを着て行く。それが自分の仕事である、と確信して。但し、そこから数十メートル離れたところでは本物の警官が交通整理をやっている。このマルコだかアントニオだかは警官の真似をしているだけかもしれない。しかし、かの警官は彼を追っ払わない。バスに乗ってこの広場を横切るわれわれも、今日もこのマルコだかアントニオだかが元気だと知って、胸をなでおろすのである。

ローマは人間が生きている街だった。十年を経た今、もう一度この街を訪ねたいと思ってい

る。きっと別のマルコやアントニオがいることだろう。

住み慣れた日本の街では、しかし、人間が感じられない。ローマでは一人の人間であった自分も、この街の中では多数の中に埋没してしまっているようだ。

(大 森 正 樹)